

大名行列からみる江戸時代

兵庫県立いなみ野特別支援学校教頭
陶山 浩

1 はじめに

歴史授業の場面において、時代を歴史的に概観できない生徒がいることには驚かされる。たとえば、鎌倉時代と室町時代の前後関係が認識できない、江戸時代の特徴を簡単にまとめられないなど……。

現在の歴史学習を学習指導要領から読み解くと、平成20年版小学校学習指導要領、第6学年歴史的分野の目標には、「国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てるようにする」とある。つまり、人物学習を基本とする歴史学習である。

平成20年版中学校学習指導要領、歴史的分野の目標には、「歴史的事象に対する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる」とある。つまり、世界史を背景とする歴史学習である。

平成21年版高等学校学習指導要領、日本史Bの目標には、「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とある。つまり、総合的な考察を基本とする通史学習およびテーマ学習である。

このように、高校日本史の段階になって、はじめて通史学習となるのである。つまり、中学校までの段階では、時代認識を養う歴史学習は十分とはいえないことになる。そこで、本稿では、高校日本史における時代認識を意識した教材開発の提案をしたい。

2 素材としての大名行列

(1)素材としての条件

時代認識を意識させる素材としては、その時代に限定される歴史事象であることが条件である。なぜならば、それがその時代の特徴を如実に表すからである。また、具体的な歴史事象は、目に見えない社会を見るための手がかりにもなるからである。

(2)江戸時代と大名行列

大名行列は、諸大名が徳川氏に対する臣従の証拠として、江戸城に人質を提出したことに始まる。1596(慶長元)年、藤堂高虎が弟の正高を証人として江戸に送ったのは、その早い例である。徳川氏の覇権確立後、諸大名の証人提出が多くなり、江戸に大名屋敷を設けるものが多くなったが、なお、それは諸大名の自発的意志によるもので、制度として実施されたわけではなかった。1615(元和元)年制定の武家諸法度も、参勤作法として従者の員数を定めただけで、100万石以下20万石以上の大名は20騎以下、10万石以下の大名は分に応ずるよう規定した。

3代将軍家光は、1634(寛永11)年、譜代大名の妻子を江戸に移し、翌35年には武家諸法度を改定し、「大名小名、在江戸交替相定むる所なり。毎歳夏四月中参勤致すべし」と規定し、参勤交代を制度化した。ここに参勤交代は諸大名の役儀・奉公として義務づけられ、毎年4月が交代期と定められた。こうして諸大名は在府・在国1年交代となり、大名妻子をはじめ多数の家臣団が江戸に常住することになった。1642(寛永19)年、制度の改正が行われ、譜代大名の交代期は6月、とくに関東の譜代大名は在府・在国半年、8月ないし2月交代となった。

8代将軍吉宗は、幕府財政再建のため、1722(享保7)年、諸大名に1万石につき100石の上米を命じ、その代償として、参勤交代を緩和し、在府半年・在国1年半としたが、1730(享保15)年、旧制に復した。その後、幕府は幕末に至り、幕政改革の一環として、1862(文久2)年、再び参勤交代を緩和し、三年一勤百日在府制を実施したが、諸大名の幕府からの離反を防ぐことはできず、かえって幕府の崩壊を早める結果となった。

3 大名行列から何が見えてくるか

(1)動く武家社会

大名行列は、約300ある藩(大名)を統率する施策として展開され、それなりの効果をもたらした。大名行列は本来、戦時の行軍に準じた臨戦的・軍事的な移動形態であったが、江戸時代の太平が続くと、次第に大名の権威と格式を誇示するための政治的なものに変容した。随員には騎馬・徒歩の武士の他、鉄砲、弓などの足軽や道具箱や槍持ちなどの中間(人足)、草履取や医師などの大名身辺に仕える者が連なつた。参勤交代などの幕府の公用のために行う大名行列は幕府によって人数が定められており、1万石の小大名でも50人から100人を引き連れることを義務付けられ、102万石の加賀藩では最盛期に4,000人にも及んだ。これは、大名行列のために出費を強いることで諸大名が経済的実力を持つことを抑制しようとする政治的意図による。そして諸大名は、ある意味この幕府の企みに乗せられた格好になり、自らの体面を守り、藩の権勢を誇示するため、幕府に義務付けられた以上の供を引き連れ、行列の服装も贅を凝らしたものとなる傾向があった。そのため、1648(慶安元)年以降、幕府はたびたび華美を控え、人数を削減するよう発令している。

(2)武家社会の視覚化

大名行列は、遠くから見ただけでもどこの家中かわかるよう、毛槍や馬印などに特徴があり、それらは江戸時代を通じて発行された「武鑑」に記され、一般でも判別できた。参勤交代の行列は、出立の際や宿場町に入る際、国入りの際などに、毛槍を持たせた中間たちに独特の所作をとらせ、人々を注目させた。行列が隊列を整えるのは国許を出るとき、江戸に入るとき、宿場の前後などの要所だけであった。行程が一日延びるだけでもその費用は馬鹿にならず、かなりの強行軍だったといわれる。全行程をあのような行列模様にしては、とても目的地にたどり着けない。しかし、これが各地の祭礼行列、神幸行列などに取り入れられ、民俗芸能の奴振りとして全国に残っている。兵庫県では、豊岡市出石町の名行列槍振り、淡路市の下司大名行列などがそれにあたる。このように、長大かつ華美に走った大名行列は、大名家にとっては大きな負担となり、次第に大名の財政を圧迫していった。これが幕府への不満を増大させ、幕末の討幕運動の遠因となったのである。

(3)大名行列の影響

大名行列にかかる経費は、江戸周辺だけの日雇い人夫、馬代、宿泊施設、物品購入費等である。そのうち、多くを占めるのが人足費である。大名行列の3分の1は専門の斡旋業者(六組飛脚問屋)に委託した人材(通日雇)によってまかなわれていた。つまりアウトソーシングである。1859(安政6)年、11万石の桑名藩松平家の場合、通日雇165名で764両の経費がかかっている。一両10万円と仮定した場合、7,640万円である。大名行列が動くことによって、これだけ多額のお金が動くことになる。

大名行列をしたてて江戸入りした後の大事なことは、江戸城登城である。毎月1日、15日、28日は、定例の登城日で、他に年始や五節句、儀礼が執り行われる日など、あわせて約20~30日登城することになる。当然、多くの大名が同じ場所をめざすことになり、江戸城前は大渋滞を起こすことになる。

4 おわりに

世は、江戸時代ブームであり、博物館における江戸時代をテーマにした展覧会が大盛況である。しかし、生徒たちにとって、江戸時代とは、われわれの生活に息づいている部分が多いにもかかわらず、百数十年以上前のできごとであり、数百年前の歴史時代となら認識は変わらない。

人は何万回見ても、見えないものは見えないといわれる。しかし、関心を持たば、全体像なり、何かが見えてくるともいわれる。少なくとも見ようとする。教師の役割の重要な点は、生徒に「何を見るか」を示し、関心を持たせることである。

今回提案した「大名行列」は、江戸時代に限定した歴史事象であり、従来の大名統制のための大名行列とは異なる見方を示した。歴史の多面性を意識した授業開発は、生徒の歴史観育成の一助になる。「見えるもの」から「見えないもの」を考察させる授業の仕掛けを意図的に組み入れることによって、歴史の見方が生徒たちに芽生えることになる。つまり、歴史的な因果関係の意識、時代構造の意識である歴史的思考力の育成につながることになるのである。

【参考文献】

- ・安藤優一郎『大名行列の秘密』NHK出版、2010.3.
- ・山本博文『参勤交代』講談社現代新書、2008.4.
- ・大石慎三郎『江戸時代』中公新書、1999.9.
- ・山本博文『武士と世間』中公新書、2003.6.